慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	第3回グローバルCOE共催シンポジウム：子どものこころの発達と教育：最新の研究成果に学ぶ
Sub Title	Development and education of the children's mind: suggestions from the latest studies
Author	今福, 理博(Imafuku, Masahiro)
Publisher	慶應義塾大学グローバルCOEプログラム人文科学分野論理と感性の先端的教育研究拠点
Publication year	2009
Jtitle	活動報告書 Vol.3, (2009.) ,p.33- 33
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	第2章：シンポジウム等の活動報告
Genre	Research Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO12002002-20100300-0033

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

9

第3回グローバルCOE共催シンポジウム
子どものこころの発達と教育 ～最新の研究成果に学ぶ～
Development and Education of the Children's Mind: Suggestions from the Latest Studies

開催日　2010年1月9日
企　画　慶應義塾大学「論理と感性の先端的教育研究拠点」、京都大学「心が活きる教育のための国際的拠点」
講演者　子安増生、明和政子、松下佳代（京都大学）、伊藤美奈子（塾内教職課程センター）、山本淳一、安藤寿康、皆川泰代（遺伝と発達班）

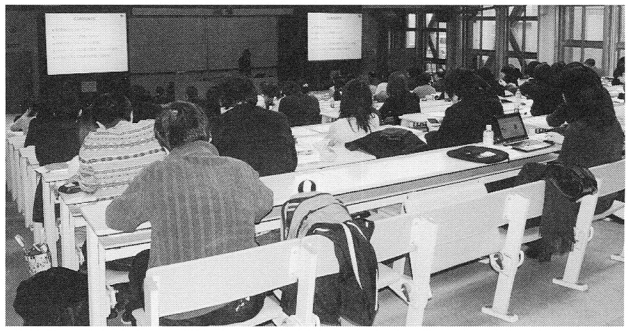
2010年1月9日「第3回グローバルCOE共催シンポジウム 子どものこころの発達と教育～最新の研究成果に学ぶ～」と題するシンポジウムが京都大学・慶應義塾大学グローバルCOE共催で開催された。「論理と感性の先端的教育研究拠点」拠点リーダー渡辺茂教授（慶應義塾大学）の挨拶と開催趣旨説明の後、京都大学と慶應義塾大学のグローバルCOEでの取り組みや成果について「心が活きる教育のための国際的拠点」拠点リーダー子安増生教授（京都大学）が発言した。発達障害のある乳幼児、児童への応用行動分析学を軸にした発達臨床研究を進めている山本淳一教授（遺伝と発達班）による司会進行の下、各発表者より話題提供が行われた後、現場での臨床実践を行っている伊藤美奈子教授（塾内教職課程センター）による指定討論、発表者と会場との全体討議によるシンポジウムが行われた。その後、東館交流室で事後検討交流会がもたれた。今回のシンポジウムは、発達と教育をめぐって行われてきたグローバルCOEの最新の研究成果を、一般の方にもわかりやすく伝えるとともに、子育て、学校教育などの現代の問題についても討議を行うことを目的とした。会場には、学生から一般の方々まで多くの聴講者が足を運んだ。

比較認知発達科学が専門である明和政子准教授（京都大学大学院）は、「ヒトらしい心とは～心の発達と教育の進化的基盤～」と題する講演で、ヒトらしい心が「いつ、なぜ、どのように」芽生えるのかについて、発達と進化の観点から取り組むことの提案や、模倣・共同注意・共感性の能力をヒトとチンパンジーで比較することによって見えてくるヒトとチンパンジーの多様性に言及しながら多くの研究成果を紹介した。ヒトとチンパンジーの赤ちゃんの心の発達を比較すると、生後しばらくは共通する部分が多いが、そのあとの道筋はそれぞれの種特有の環境に適応したものへと方向づけられていくことに触れ、その中で、人間社会の「おせっかい」な環境がヒトを進化させてきた要因ではないかという洞察を示した。

乳幼児の脳機能を非侵襲的に測定できるNear-Infrared Spectroscopy（NIRS）を使った研究を行っている皆川泰代特別研究准教授（遺伝と発達班）は、「赤ちゃんの脳を見る～コミュニケーション能力の育ち～」と題する講演を行い、NIRS測定の方法論から乳幼児の言葉の聞き取り、さらに乳児と母親のコミュニケーションにおける脳活動の測定によって、自分の母親、自分の子供が特別な存在であることを紹介した。近年、脳画像技術の目覚ましい進展によって、赤ちゃんの発達と脳機能についての発見が相次いでいる。その中で、乳幼児の研究を積み重ねることが発達障害児の早期発見に役立つことに触れ、次世代イメージング研究の展望を示した。

双生児法を用いた実証研究に取り組んでいる安藤寿康教授（遺伝と発達班）は、「ふたごから見るヒトのこころ～社会性と認知の発達～」というタイトルで講演を行い、双生児研究の方法論や遺伝と環境の交互作用について、教育との関係から研究成果を紹介した。その中で、遺伝の普遍性、共有環境の希少性、非共有環境の優位性という3つの双生児研究の柱が存在することを示し、遺伝要因と環境要因の関わりからヒトの社会性と認知の発達を考えていくことを提案した。

学びの援助という視点から教育システムの分析と構成を行っている松下佳代教授（京都大学高等教育研究開発センター）は、「学びを評価する～パフォーマンス評価の試み～」と題する講演を行った。ある特定の文脈のもとで、さまざまな知識や技能などを用いながら行われる、その人自身の作品やふるまいを直接的に評価するパフォーマンス評価を、小学校6年生の算数において実践したものについて紹介した。その中で、パフォーマンス評価は、学習者の学びの促進や教員の専門成長のために用いることを提言し、これからのパフォーマンス評価の可能性について述べた。目には見えない子どもたちの学びそのものをどのように評価するのかという難しいテーマであったが、今後の評価の在り方についての展望を示した。

これらの講演の後の指定討論では、伊藤美奈子教授（塾内教職課程センター）が自身の臨床経験を踏まえて発表者との意見交換を行った。全体討論では、会場と発表者との間で議論が活発に交わされた。今後とも、京都大学と慶應義塾大学との交流を深め、お互いの研究成果を社会に還元するシンポジウムとして、ますます発展することが期待される。　（今福理博）

On the 9th of January, 2010, the third joint GCOE symposium of Kyoto-Keio University was held at Keio University. The title of the symposium was "Development and Education of the Children's Mind: Suggestions from the Latest Studies". Four researchers from two GCOEs reported their latest studies on human evolution and development, genetic and environmental factors of development and assessment methodology of education. This symposium was opened to the public, students as well as researchers to discuss the recent problems such as childcare and school education.